

- 白大学短期大学部研究紀要』(39)、pp.115-128
- 天童睦子 (2016)「育児戦略と言説の変容－育児雑誌の半世紀－」、天童睦子編『育児言説の社会学－家族・ジェンダー・再生産』、世界思想社、pp.20-42
- 内閣府 (2019)「第1部 少子化対策の現状 第2章 少子化対策の取組 第1節 これまでの少子化対策」、『令和元年版 少子化社会対策白書』、内閣府、pp.53-65
<https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2019/r01pdfhonpen/pdf/s2-1-1.pdf> (2019.12.25入手)
<https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2019/r01pdfhonpen/pdf/s2-1-2.pdf> (2019.12.25入手)
<https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2019/r01pdfhonpen/pdf/s2-1-3.pdf> (2019.12.25入手)
- 中田奈月 (2004)「『保育者』言説の変遷－厚生労働白書の分析から－」、『奈良佐保短期大学研究紀要』(11)、pp.17-29
https://narasaho-c.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=117&file_id=22&file_no=1 (2019.10.29入手)
- ベネッセコーポレーション編『ひよこクラブ』1993年11月号(第1巻第1号)～2019年7月号(第26巻第9号)
- 元橋利恵 (2014)「『男女共同参画』時代の母親規範－母子健康手帳と副読本を手がかりに－」、『フォーラム現代社会学』、関西社会学会、2014年13巻、pp.32-44
https://www.jstage.jst.go.jp/article/ksr/13/0/13_KJ00009378604/_pdf/-char/ja (2019.10.29入手)
- 李蓮花(2017)「児童福祉政策から人口・雇用政策へ－『厚生(労働)白書』からみた日本の保育政策－」、『静岡大学経済研究』、第21巻3号、pp.55-76
https://shizuoka.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=8790&file_id=31&file_no=1 (2019.09.20入手)

仕事と育児を両立しようとする家庭への支援からすべての家庭への支援という変化、仕事と育児の両立が求められた後の働き方や保育サービスの多様化、待機児童が注目される時期と育児・家事・仕事のバランスをとることが求められる時期が一致すること、女性が育児の担い手であり続けることであった。

主な相違点は、少子化対策では子どもへの視点が弱いことである。子どもへの視点とは、子どもに良い保育が与えられることや子どもがきちんと育つことなど、関連記事においてママが子どもを預けて働くことに不安や抵抗感を抱く要因となっている事柄である。読者参加型の傾向が強い『ひよこクラブ』の関連記事では、読者であるママが子どもへの視点を持つことによって誌面にもこの視点が反映されていると考えられる。そして、この視点を持つことによって関連記事では不安や葛藤を抱えたママが描かれ、少子化対策のように一つの方向に短期間で進むのではなく、何度も同じような疑問や不安を問い直しながら時間をかけて変化してきたと考えられる。前述の通り関連記事は少子化対策を追いかける形で変化してきたが、このことが原因の一つとなっているのではないだろうか。

[3] 今後の課題

本研究では『ひよこクラブ』の関連記事と少子化対策の取り組みとの比較を行い、少子化対策には子どもへの視点が見られないことを示した。この結果から、子どもや保育への視点を持つ行政文書であると考えられる『厚生(労働)白書』との比較検討を行うことを今後の課題とする。また、本研究によって、子育てを担うのは母親であり、父親の役割は子どもの預け先や協力者にとどまったことが明らかになった。育児に協力的な男性を理想とする「イクメン」ブームを踏まえ、育児における父親の役割を検討することも今後の課題としたい。

文献一覧

- 厚生労働省 (2019) 『令和元年 (2019) 人口動態統計の年間推計』、厚生労働省、
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suikei19/dl/2019suikei.pdf>
 (2019.12.25入手)
- 新村出編 (2018) 『広辞苑 第七版』、岩波書店
- 全国出版協会出版科学研究所編 『出版指標 年報』 1994年版～2019年版
- 高橋均 (2016) 「変容する育児雑誌の現在 - 『ジェンダー化』・『教育化』の視点から -」、
 天童睦子編 『育児言説の社会学 - 家族・ジェンダー・再生産』、世界思想社、pp.
 43-77
- 天童睦子 (2002) 「育児雑誌の変遷と母の形成 - 育児知識との関連において -」、『目

の担い手であり続け、パパは子どもの預け先や育児の協力者にとどまったのである。なお、これらは時期によって多少の変化が見られるため、詳細は後述する。

全体を通して現れた3つの変化を示す。第一に、ママが抱える不安やその不安への対応が変化したことである。ママは子どもを預けること自体が子どもに悪影響を与えるという不安を抱えていたが、預けた上で子どもに悪い影響を与えないために何をすべきか、子どもが預け先に馴染めるかなど、預けることを前提とした不安へと変化した。これらの不安に対して、預けることは子どもに良い影響も与えられるという内容のみから、一緒に過ごす時間の長さは重要ではないことを示し不安自体を解消するように変化した。

第二に、子どもを預けることによるメリットが語られることが増加し、内容にも変化が見られた。ママにとっては精神的に余裕ができることやそれによって育児に前向きになれることであり、就労の有無に関わらず預けることが推奨されるようになった。子どもにとってはママに余裕ができ、ママと子どもの関係が良好になることであったが、子ども自身へのメリットが多く示されるように変化した。

最後に、働くママや子育てを行うママについての変化が見られた。働くママが増加したことにより、ママが働くことが特別なことではなくなった。保育園や保育サービスを利用することで育児自体の負担は軽減されるようになったが、その分仕事をしなくてはならないため、ママの負担は重いままであった。働くママが増えたことによる変化に加え、ママ自身の生活が大事にされるようになるという変化が見られた。すべての時期を通してママは子ども第一であることが求められてはいるものの、ママの負担軽減を目的とした保育サービスの利用が推奨されるようになった。また、ママが希望する生活に合わせた仕事や働き方を選ぶようになることや、ママ自身が寂しいという理由で子どもを預けたくない様子も見られるようになった。子どもだけでなくママの生活や気持ちを大事にするようになったことがわかる。

〔2〕少子化対策との関係

ここまで『ひよこクラブ』の関連記事の内容の変化について考察してきた。本項では、『令和元年版 少子化社会対策白書』をもとに、1990年以降の日本政府による少子化対策の変化と、『ひよこクラブ』の関連記事の変化との関係（比較）を考える。関連記事の中で重要な意味を持つ女性の就労や待機児童の課題が少子化対策の要となっていることや、1990年以降の主要な子育て支援の政策や法律が少子化対策の一環とされていることがその理由である（内閣府 2019, p.65）。

関連記事と少子化対策の内容の変遷は、関連記事が少子化対策を追いかける形で時間的なずれは存在するものの大まかな流れは同じであった。両者に共通する点は、

とがわかる。保育園に入園できるかという不安に加え、保育の質が低く子どもに危険が及ぶ保育園への不安が見られた。以前より具体的な情報や対処法が紹介されたことから、危険な保育園の存在がママにとって身近なものとなり危機感を持つようになったと考えられる。なお、第4期に認可施設に預けることを強く望むようになった理由の一つとして保育の質の低下や子どもに危険が及ぶ保育園の存在が考えられる。しかし、保育園や保育士全体への評価が変化しなかったことから、子どもに危険が及ぶ保育園や保育者は一部であり、保育園や保育士への期待は高いままであったと考えられる。

第4期の特徴として、ママ自身に焦点が当てられたことも挙げられる。ママ自身の希望をもとに働き方や仕事を選択することが示されると同時に、ママ自身に預けたくない気持ちがあることが浮き彫りになった。これまで、働くことや子どもを預けることについて、子どものためになることを選択することが強調されてきたが、ママの希望によって選択することが肯定されたと言える。一方で、依然として子どもを第一に考えることや子どものために行動するママの姿も求められた。

4. 全体的な考察と課題

[1] 4期にわたる全体的な考察

時期区分ごとの考察をもとに全体的な考察を行った(図2)。第1期から第4期まで共通して見られた内容は、ママが子どもを預けることへの不安やためらいを抱えていること、その一方で預けることは両者ともに良い影響があるとされたことである。またママは子どものことを第一に考えて行動する存在であり、家事と育児

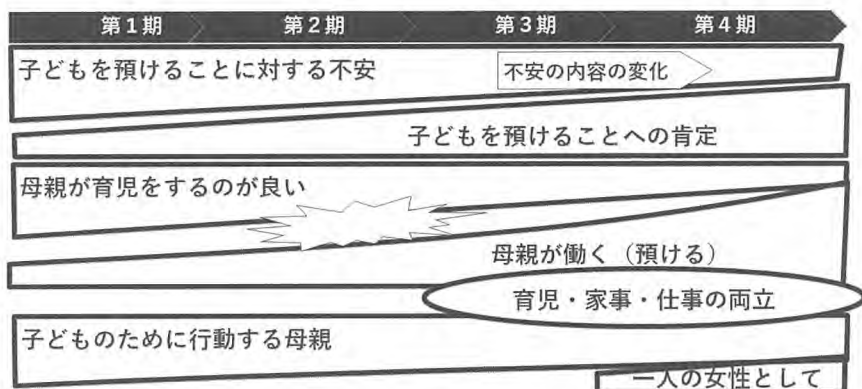


図2 4期にわたる共通点と変化

預けることへの罪悪感に対して、専門家は子どもに良い影響があることを主張するとともに、ママが働くことが家族のためになるとして推奨した。小さい子どもを保育園に預けることがかわいそうという認識が変わってきたことも紹介された。なお、子どもを預ける場合は子どもと向き合う時間やスキンシップが大切とされた。預けるときに子どもが泣くことでママが罪悪感や切なさを感じてしまうと、子どもがさらに離れ難くなってしまうため、預けられる子どもはかわいそうではないとママが考えることや笑顔で預けることが勧められた。

③保育園（＝毎日）に預ける親、家庭

仕事以外の理由もあるが、ママが働く家庭や共働き家庭が主であった。

④働くママ

ママが働くことは経済的な面から子どもの将来のためになり、子どもを預けられないことが理由で仕事を辞めるのはもったいないとされた。しかし、働くママは子どもがいる人生を選んだため仕事だけでなく育児や家事も大切にしなければならぬとされ、働くママが子どもと向き合う時間を確保するために工夫する様子が示された。働き方はフルタイムや時短勤務、起業など様々であり、ママの希望や価値観によって適した働き方や、働き方に合った預け先を選ぶことも求められた。保育園に入園させるために育休期間を短縮するという手段も紹介された。ママは保活や仕事復帰の準備で忙しいが、育休期間を楽しむことも忘れないようにとした。

⑤保活、待機児童

保育園に入園できない不安があり、子どもが1歳になるまで待つと入園が難しいことや保活の開始時期が年々早まっていることが示された。保活の具体的なテクニックや戦略などが紹介されるとともに、希望の園に落ちた場合の対応を考えることも求められた。

⑥育児・家事・仕事をこなすママ

ママが育児・家事・仕事を担うことが前提であり、仕事復帰をした後に職場や預け先、家庭でトラブルが起りやすいことが示された。これらをこなすにあたりバランスをとることやパパと分担をすること、妥協をする必要があるとされた。

考察

第4期は、保活や待機児童問題への関心が高まった時期である。2016年に「保育園落ちた日本死ね」という言葉が話題となったことがこの要因と考えられる。この「保育園落ちた」という言葉は、認可保育園の不承諾通知が届き保活に失敗したことを指す。保活への不安や開始時期が年々早まっていることだけでなく、落ちた場合の具体的な行動を紹介する記事が増加したことからもこの言葉の影響が大きいこ

ママ自身のために預けることにはためらいや罪悪感があるが子どものためであれば肯定されるなど、その理由によって評価が変わったと言える。

ママが働くことが当然となったことによって、育児・家事・仕事すべてをこなすことが求められるようになった。ママが工夫して作った時間は子どものために使うとされ、育児が疎かになるのであれば働き方を見直す必要があるとされた。したがって、ママが働くことは認められたが、あくまでも子どものために努力するママが求められていると考えられる。

保育園は子どもを預かるだけの場所ではなく、質の高い保育や地域の子育て支援の場であることが求められ、保育士をはじめとした保育者はプロフェッショナルとして評価されるようになり始めた。このことから、子育てはママとしての経験だけでなく専門性や正しい知識を持つ人が行うことが求められるようになったと考えられる。また、第2期と比較して保活の記事が増加し、より詳細が示されるようになり、保活への注目度が高くなったことがわかる。

〔4〕第4期：「保育園落ちた」（2016～2019年）

①預け先

仕事などの理由で長期的に子どもを預ける場合は、認可保育園、認可外保育園、それ以外の保育サービスの順に利用を希望するとされた。短時間預けるときには、子どもが元気な場合は保育サービスを利用することが勧められた。子どもが病気の場合にはママやパパが子どもの世話をすることが求められ、それができない場合にじいじ・ばあばや病児・病後児保育に預けるとされた。

保育園は、子どもが同年代の他の子どもと関わり成長する場合や、ママ以外の複数の人から愛情を受ける場として評価され、保育者は子どもの安全を確保するとともに細やかな世話の中で自立をサポートする役割を担うとされた。しかし、保育園での生活や保育士の関わり方に不安がある園も存在するため、保育園を選ぶことが求められた。園選びに失敗した場合には転園や退園を検討することも紹介された。

②預けること

働いていないママも子どもを預けてリフレッシュすることが勧められ、仕事以外の理由で子どもを預けることが肯定された。預けることは子どもとママの両方に良い影響があるとされた。また、預けることは保活を有利に進める手段にもなった。子どもを預けることのデメリットとして、罪悪感や申し訳なさだけでなく、子どもの成長の瞬間を見られないことや子どもと離れることへの寂しさが挙げられた。子どもの成長や発達に悪影響があることへの不安や、保育の質の低下によって子どもに危険が及ぶことへの懸念も示された。

育て方が良いという考えがあり、ママも罪悪感や迷いを抱えていた。さらに、ママが子どもを手元で育てたいと考え、成長を見逃すことに不安を感じていることが語られた。預けることを前提とした上での不安も現れた。ここで、先輩読者や専門家の意見を用いて不安の解消に努める様子が見られた。預けることで子どもに良い影響があると示すとともに、不安を感じる必要はないとする意見や一定の条件を満たせば問題はないとする意見も現れた。また、ママと子どもが一緒に過ごす時間については、量よりも密度が重要であるとされた。そして、ママが預け先との信頼関係を築くなど、子どものためにママが認識や行動を変えることも求められた。

③保育園（＝毎日）に預ける親、家庭

他の理由の場合もあるが、ママやパパが働いていることが主な理由であった。1990年代とは異なり、じいじ・ばあばに預けられないことは言及されなかった。

④働くママ

ママは仕事だけでなく育児も大切にしなければならず、育児への影響が大きい場合には働き方の見直しが推奨された。子どもとの時間を作るために工夫し、子どものための愛情表現も求められた。ママが忙しくなることへの不安や働くことへの葛藤も見られたが、仕事でのストレスを家庭で、家庭でのストレスを仕事で発散できるというメリットも示された。働くママから時短のテクニックや子どもとの接し方を学ぶという記事も現れた。2012年には、経済的な理由で働くことが多いとされた。

⑤保活、待機児童

保育園に入園できず待機児童になってしまうという不安が語られ、保活で失敗しないためのテクニックやポイント、保活のスケジュールが紹介された。その一方で保育園を選ぶ必要があるとされた。また、子どもを預けられない求職中や在宅ワークのママの大変さが語られた。

⑥育児・家事・仕事をこなすママ

ママの復職後に職場、預け先、家庭でトラブルが起きるため、その対策を紹介する記事が現れた。仕事と育児を両立できるかというママの不安が多く紹介され、復職後にはママに負担が集中しがちであるとされた。完璧を目指すのではなく自分に合った妥協点を見つけることが不安の解消や両立にとって重要とされた。

考察

第3期は子どもを預けることやママが働くことが当然となった時期である。しかし、預けることへの不安やためらいがなくなったわけではなく、預けることで子どもに悪影響がないことや子どものためになることが強調された。つまり、子どもを預ける際に保育サービスを利用することへの抵抗感は薄れたものの存在しており、

2000年代初頭には、働きたくても保育園に入れないという悩みが語られていた。そして2009年には、早めに準備をしておかないと保育園に入れなくなるという注意喚起がされ、保育園の確保や入園へのアドバイスが掲載された。

考察

第2期は働くママが増え、子どもを預けざるを得なくなった時期と言える。第2期は他の時期と比べて関連記事が少なく、保育園に関する内容は極端に少なかった。その一方で働くママの7割以上が子どもを保育園に預けているとされたことから、働くママが保育園に子どもを預けることが一般的になっており、利用の是非を考える必要が無かったため保育園についての記事が少なかったと考えられる。

保育園に子どもを預けることが増えた第2期でも、預けることでママと子どもが離れる時間が増加することへの不安があった。このことから、ママと子どもが一緒にいることが良いとする育児観が第2期にも存在したと言える。第2期では時間の濃さや密度という言葉を使い、ママと子どもが一緒にいる時間の長さが直接的に子どもに影響を与えるわけではないことを主張した。働くママが増える中で、時間の濃さや密度という言葉がママたちの免罪符になっていたと考えられる。また、働くママは短い時間で育児や家事を行うテクニックを持っているとされ始めた。

なお、子どもを預けることが一般的になったのはあくまでも働くためであり、リフレッシュ目的やママの用事で子どもを預けることは少なかった。

[3] 第3期：リフレッシュ目的への注目／保活の始まり (2010～2015年)

①預け先

子どもを預ける理由として、病気や仕事、保育園の送迎及びその前後の時間に子どもを預けるだけでなく、ママのリフレッシュを目的とすることも紹介された。リフレッシュ目的で預けることをわがままやぜいたくであると考える人が多いが、保育士や専門家がそれを否定することで利用を促した。以前と比較して少なくなっているが、保育園に預ける良い影響だけではなく不安も存在した。保育園での生活を実際に見ることで安心できるとされ、お試し保育や一時保育で子どもを慣らすことが勧められた。保育士の育児テクニックや子どもへの関わり方を保育士から学ぼうとする記事も現れた。

②預けること

子どもを預ける時間があることはママにも子どもにもメリットがあることに加え、預け先はいざという時の身内以外の頼れる場所になり心強いとされた。反対に、子どもの成長に悪影響がある可能性や預けることがかわいそう、3歳までは親元で

ことが示され、短時間の場合にはじいじ・ばあばやパパといった身内に預けることが優先された。身内以外の保育サービスの利用が推奨されたが、利用への不安や抵抗感が大きかった。2003年にはママのリフレッシュ目的で子どもを預けることも取り上げられたが、実際に利用したという事例は少なかった。

②預けること

ノイローゼになりやすいなどの理由から専業主婦であっても子どもを預けることが大切であるとされた。そのため、短い時間だけ預けることが推奨され、実際に預けた事例も紹介された。また、預けることは子どもにとっても良い経験、良い刺激になるとされた。しかし、預けることへの不安や抵抗感、子どもの成長を見逃すかもしれないという心配、子どもの心の発達に悪影響があるかもしれないという不安も見られた。これに対し、時間の濃さや密度といった言葉を使うことで子どもと過ごす時間が短いことによる不安を解消しようとする様子がうかがえた。離れる時間の大切さには触れながらも「3才までは母子密着が基本（表記：掲載の通り）」（2000.3, p.155）と専門家が語ることもあった。さらに、一時的に子どもを預けることをばあばから責められた経験も紹介された。

③保育園（＝毎日）に預ける親、家庭

関係する内容は掲載されなかった。

④働くママ

育児から離れる時間が気分転換になることやそれによって育児に前向きになれることをママ自身が語り、専門家も子どもが幼くてもママが社会に出て働くことを推奨した。ママが働くことで子どもの世界が広がるなど、子どもにとっても良い影響があるとされた。その一方で、ママたちは子どもに寂しい思いをさせる不安や子どもを預けて働くことへの迷いを抱えていた。そのため、子どものために在宅での内職を選ぶ人もいれば、子どものためにも保育園に預けたいと考えて働く人もいるなど、働く理由やその選択は様々であった。また、働くママは家事や育児の裏技を持ち、時間を上手に使っているとされ、そのテクニックを学ぶ記事が現れた。

⑤保活、待機児童

「保活」とは、子どもを保育園に入園させるために保護者が行う活動を指した造語である。就活¹や婚活²とともに保活という言葉が使われるようになったことで、保護者が子どもの保育園入園のために活動していることが社会的に認知されるようになった。『ひよこクラブ』では2000年代には保活という言葉は使われなかったが、

1 就職活動を省略した言葉（新村編 2018, p.1372）。

2 結婚相手を探す活動であり、就活になぞらえた造語（新村編 2018, p.1117）。

ることが子どもに悪影響を与えるという考えも存在した。実際に子どもを保育園に預けて働くことがかわいそうと言われた経験や、非難された経験が語られた。そのような言葉を気にしつつも実際に子どもを預けることで考えが変わったママや気にならなくなったママが紹介された。

③保育園（＝毎日）に預ける親、家庭

他の理由がある可能性も示されているが、ママが働く家庭が中心とされている。共働きかつ、じいじ・ばあばが子どもを預かることができない家庭の子どもは「事情のある子ども」（ベネッセコーポレーション 1996.10, p.185. 以下、『ひよこクラブ』からの引用は月号とページのみ表記する）とされた。

④働くママ

読者や専門家は、働くことがママの気分転換になり、それによって子どもにもメリットがあるとした。その一方で、ママが働くことは子どもが幼い頃から保育園に入園することに直結し、子どもの成長や心への悪影響を懸念する声やかわいそうという言葉が目立ち、ママが罪悪感を抱えていることも示された。

考察

第1期は、ママへの期待が大きい時期である。子どもを預けることはママと子どもが離れる時間が増えることになるが、それに対して愛情不足や子どもの成長への不安が語られた。さらに保育園以外の保育サービスの中で最も注目度が高いと言える家庭福祉員は、子どもを産んだ女性に限定された職業ではないにも関わらず保育ママと呼ばれ、3人の子どもの産み育てた女性の家庭福祉員が紹介された。また、子どもを預ける際には保育園よりもじいじ・ばあばを先に頼るとされたこともこの時期の特徴である。したがって、子どもを育てた経験がある「ママ」に安心して子どもを預けることができ、ママと離れる時間があるだけで子どもの成長や子どもが受ける愛情に不安を感じるほど、ママこそが子どもを育てるのにふさわしい存在とされていたと考えられる。しかし、当時のママたちはこの考えに完全に同調していたとは言い難い。当時のママはじいじ・ばあば、専門家や同世代のママ、時には自分自身の経験という異なる考えの中で苦悩していたことがうかがえる。

また、第1期はママの働き方や仕事限定されていたことから、働くママは増加しているものの働くことが一般的とは言えない時期であったと考えられる。

〔2〕第2期：身内に預けて働く（2000～2009年）

①預け先

ママが働くなど長期的に子どもを預ける場合は7割以上の人が保育園を利用す

表1 時期区分と記事内容の項目による分類

項目	第1期(1993～1999年)	第2期(2000～2009年)	第3期(2010～2015年)	第4期(2016～2019年)
①預け先	(ア) 預ける順番 (イ) 保育園イメージ (ウ) 保育園以外の預け先	(ア) 預ける順番 (イ) 保育園イメージ (ウ) 保育園以外の預け先	(ア) 預ける順番 (イ) 保育園イメージ (ウ) 保育園以外の預け先 (エ) 保育園選び (オ) 保育者	(ア) 預ける順番 (イ) 保育園イメージ (ウ) 保育園以外の預け先 (エ) 保育園選び (オ) 保育者 (カ) 保育園の種類
②預けること	(ア) 親にとって (イ) 子どもにとって (ウ) 預ける時の子どもの泣き (エ) 周囲の言葉	(ア) 親にとって (イ) 子どもにとって (エ) 周囲の言葉	(ア) 親にとって (イ) 子どもにとって (ウ) 預ける時の子どもの泣き (エ) 周囲の言葉	(ア) 親にとって (イ) 子どもにとって (ウ) 預ける時の子どもの泣き
③保育園(＝毎日)に預ける親、家庭	働くママ 仕事以外の理由 「事情がある」		働くママ 仕事以外の理由	働くママ(パパ) 仕事以外の理由 「保育の必要性」認定
④働くママ	(ア) 親自身 (イ) 子どもへの影響 (ウ) 仕事	(ア) 親自身 (イ) 子どもへの影響 (ウ) 仕事 (エ) 子どもを預けて働き始める時期 (オ) 働くママのテク	(ア) 親自身 (イ) 子どもへの影響 (ウ) 仕事 (エ) 子どもを預けて働き始める時期 (オ) 働くママのテク	(ア) 親自身 (イ) 子どもへの影響 (ウ) 仕事 (エ) 子どもを預けて働き始める時期 (オ) 働くママのテク
⑤保活、待機児童		(保活や待機児童という言葉はない)	(ア) 保活への不安 (イ) 具体的な活動 (ウ) 働けないママ	(ア) 保活への不安 (イ) 具体的な活動 (ウ) 働けないママ (エ) 保育園に落ちた場合 (オ) 情報の混乱
⑥育児・家事・仕事をこなすママ			不安、大変さ 完璧でなくてよい	トラブル対策 バランスをとる

どもを預けることでママに精神的なメリットがあるとされる一方で、子どもと過ごす時間が短くなる不安や預けることへの罪悪感を抱えていることが語られた。実際に預けてみることで不安がなくなったという意見や、預けずに自分で育てたいという意見を持つママがいることも示された。ママに精神的な余裕があることで子どもがより良い環境で生活できることや、預け先で成長が促されるなど子どもにとってもメリットがあるとされた。しかし、ママと子どもが一緒にいることが良い、預け

以上の条件をもとに抽出したところ関連記事は70項目となり、各年に現れた関連記事の本数を図1に示す。なお、記事には編集者が書いた文章、専門家が語った内容、読者投稿や読者が語った内容が存在しすべての文章を分析対象とした。専門家には学者や保育士をはじめとして保育情報アドバイザーなども含まれる。

3. 結果と考察

関連記事の分析を行った結果、記事の内容から4つの時期区分が現れた。それぞれ、第1期：子どもを預けて働くことが「かわいそう」(1993～1999年)、第2期：身内に預けて働く(2000～2009年)、第3期：リフレッシュ目的への注目／保活の始まり(2010～2015年)、第4期：「保育園落ちた」(2016～2019年)の4期である。

各時期に現れた記事の内容は次のように分類された(表1)。第1期は「①預け先」「②預けること」「③保育園(＝毎日)に預ける親、家庭」「④働くママ」、第2期はこれに「⑤保活、待機児童」を追加し、第3期と第4期にはさらに「⑥育児・家事・仕事をこなすママ」が追加された。なお、この分類のうち①預け先 ②預けること ④働くママ ⑤保活、待機児童には下位項目が現れた。それぞれ、「①預け先」では(ア)預ける順番(イ)保育園イメージ(ウ)保育園以外の預け先(エ)保育園選び(オ)保育者(カ)保育園の種類、「②預けること」では(ア)親にとって(イ)子どもにとって(ウ)預ける時の子どもの泣き(エ)周囲の言葉、「④働くママ」では(ア)親自身(イ)子どもへの影響(ウ)仕事(エ)子どもを預けて働き始める時期(オ)働くママのテク、「⑤保活、待機児童」では(ア)保活への不安(イ)具体的な活動(ウ)働けないママ(エ)保育園に落ちた場合(オ)情報の混乱である。

本章では、以上の時期区分と記事の内容をもとに時期区分ごとの分析を行う。

『ひよこクラブ』では母親、父親、祖父母がそれぞれママ、パパ、じいじ・ばあばと呼称されることに従い、本章ではこの名称を用いる。

[1] 第1期：子どもを預けて働くことが「かわいそう」(1993～1999年)

①預け先

保育園の利用はママの精神的負担の軽減や子どもが成長することに役立つという点でママにも子どもにも良いとする一方で、保育園への不信任も語られ、じいじ・ばあばを先に頼ることも示された。保育園以外の預け先として幾つかのサービスが紹介され、専門家が利用を推奨した。その中でも家庭福祉員は子守の達人とされた。

②預けること

一人の時間ができることで心の余裕ができること、前向きになれることなど、子

してきた（全国出版協会出版科学研究所編 1994, 1995, 1996, 1997, 1998, 1999, 2000, 2001, 2002, 2003, 2006, 2007, 2008, 2009, 2010, 2011, 2012, 2013, 2014, 2015, 2016, 2017, 2018, 2019）。なお「読者参加型」育児雑誌とは、読者投稿や読者間の情報共有によって読者の共感を誘う育児雑誌であり、1990年代に一世を風靡して以来、主流となった。また、高橋（2016）が父親の育児参加と子どもの能力開発志向を軸に1990年代以降の母親向け育児雑誌を配置したところ、『ひよこクラブ』は中間的な位置であった。したがって、『ひよこクラブ』は子育て家庭の育児観やその変容を把握しやすい育児雑誌であり、その中でも読者間の情報共有や共感を重視しており、父親の育児参加や子どもの能力開発志向において極端な偏りがないと言える。そのため『ひよこクラブ』は一般的な子育て家庭が持つ価値観を反映してきたと考えられ、本研究の研究対象として適切であると言える。

2. 研究の方法

『ひよこクラブ』のうち、欠号である1993年12月号から1994年4月号を除く創刊号の1993年11月号から2019年7月号、計304冊を分析対象とした。各号の目次を閲覧し、子どもを預けることに関係が深いと考えられる記事を「関連記事」として抽出した。関係深いとする条件は「預ける」「働くママ」及びこれに準ずる文言が記事の題名に含まれること、または題名の中で保育園をはじめとした育児施設が子どもの預け先として扱われていることである。なお、「働くママ」をキーワードとした理由は、子どもの預け先の普及の背景に女性の就労や社会進出の増加とそれらを促すという目的があること、『ひよこクラブ』においても子どもを預けることと母親が働くことが同一の文脈で語られてきたことである。

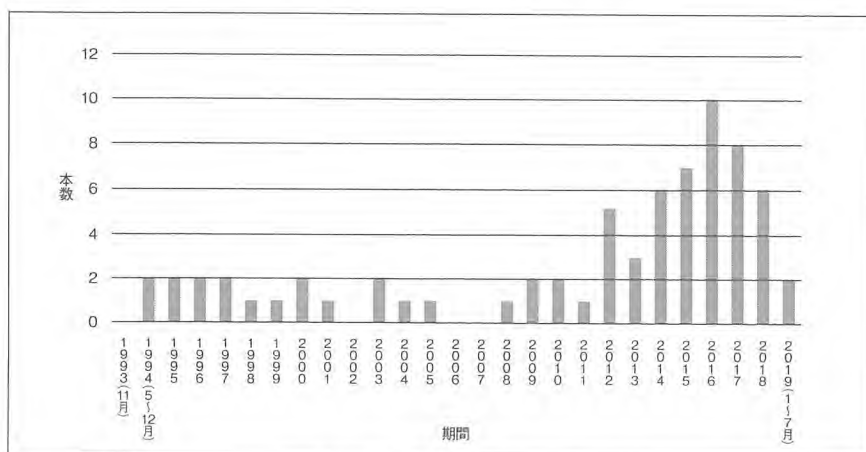


図1 関連記事の本数の推移

論文

育児雑誌『ひよこクラブ』における 子どもを預けることに関する言説の変化

栗原 結海*

Changes in discourse on leaving children with day care centers and others
in childcare magazine 'Hiyoko Club'

Yuumi KURIHARA

1. 問題と目的

日本が抱える少子化や児童虐待という社会問題の原因の一つとして、母親の育児負担の大きさが挙げられる。両親が協力して育児を行うことを求める傾向は強くなっているものの、多くは母親が一人で育児を行っているのが現状である。子育ては母親が家庭で行うべきとする育児観が多くの人々の考えに根付いており、このような育児環境が改善されず存在し続けているのではないだろうか。

育児に関わるメディアを用いて育児観を明らかにした研究として中田 (2004)、元橋 (2014) が挙げられる。これらは『厚生 (労働) 白書』や母子健康手帳及び副読本を分析対象としているため、一般的な子育て家庭が持つ育児観よりも行政の理想を示すと言える。子育て家庭にとって身近なメディアである育児雑誌の研究を行った天童 (2016) では、育児雑誌に現れる育児言説の変容を明らかにしており、特定の育児観に焦点を当てているわけではない。そこで本研究では、子育ては母親が行うべきであるとする特定の育児観が、一般的な子育て家庭においてどのように捉えられているのかを明らかにすることを目的とする。なお、子どもを預けるという具体的事象に焦点を絞り、研究を行う。

本研究では、育児雑誌『ひよこクラブ』を研究対象とする。李 (2017) が指摘したように、行政文書は国や行政の意向が反映されており、一般的な子育て家庭の価値観が読み取れるとは言い難い (李 2017, p.56)。行政文書以外の育児に関わるメディアには育児雑誌と育児書がある。天童 (2002) によると育児雑誌は育児書に比べて読者のニーズに敏感であり、読者である子育て家庭の育児に関わる価値観の変化を把握しやすいという特徴がある (天童 2002, p.116)。そのため、育児雑誌は行政文書や育児書に比べて子育て家庭の価値観やその変容を把握しやすいと言える。育児雑誌の中での『ひよこクラブ』の立場を明らかにする。『ひよこクラブ』は「読者参加型」育児雑誌の代表格であり、1993年の創刊から継続的に読者を獲得

* 2020年お茶の水女子大学生活科学部人間生活学科卒業。現在、一般企業勤務。